

腰痛の最近の世界的な研究によると、2020年では6.19億人のヒトが罹患し、2050年には8.32億人に増加することが報告されている。罹患年齢では男女ともに50～54歳が最も多い。比率では高齢になるほど高くなり、80歳前後でピークとなる。先進国ほど腰痛の頻度が高く、それに費やされる医療費も同様で、米国、日本がトップクラスである。そのため、腰痛の機序や治療を低コストで行わなければならない試みがなされ、多くの論文が執筆されている。

慢性腰痛患者へのブロック注射から得られた知見からは、疼痛発生部位の可能性として、椎間板39～41%、椎間関節15～32%、仙腸関節13～18.5%と報告された。年齢分布では、椎間板性腰痛は椎間関節、仙腸関節由来より低いとされ、36～47歳と考えられている。腰痛の機序でフォーカスが当たっているのが比較的若い年代の椎間板と、Modic変性、高齢者後弯による筋肉の脂肪化、減少による腰痛である。Modic変性に関しては本稿を参考にさせていただきたい。

椎間板性腰痛の症状として、前屈時の腰痛悪化がその指標とされる。椎間板腰痛の理学所見はどのようなものであろうか？当院で椎間板性腰痛と診断され、固定手術を施行された87名を対象に調査した。術前と比較して60%以上の改善が得られた患者群をおおむね成績良好とし椎間板性腰痛と仮定し、後ろ向きに術前の臨床症状を検討した。腰痛の性状として常時腰痛90%、立位腰痛増強35%、座位腰痛増強65%、前屈時増強65%、後屈時増強35%であり、多彩な症状を呈することが判明した。一方で骨粗鬆症、筋減少による変形を中心とした腰痛、身体能力の低下は近年増加の一途をたどる、低ビタミンD血症、低骨量、低筋量、腰痛各々の因子の相関が報告されている。腰痛を認める後弯は骨粗鬆症、骨質低下との合併が多く、インピーダンス法を用いた2,000名以上の検討では、後弯、低骨量、骨質低下、体幹筋量、四肢筋量の低下は強い正の相関を認め、体幹筋量の低下は腰痛と相関した。以上を踏まえ、腰痛の診断と治療はまだまだ不明の点は多く、今後さらなる検討が必要であろう

(大鳥精司)

令和7年5月19日発行

関節外科－基礎と臨床－ Journal of Joint Surgery Vol.44 No.5

発行：年14回（年12回発行＋増刊号2回）

編集顧問 高倉義典／進藤裕幸／筒井廣明／吉矢晋一／帖佐悦男

編集主幹 高平尚伸

編集委員 岩堀裕介／内尾祐司／尾崎敏文／岡崎 賢／國吉一樹／大鳥精司／兼氏 歩／谷口 晃

発行人 吉田富生

発行 (株)メジカルビュー社

〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町2-30

TEL 03-5228-2050／FAX 03-5228-2059

ホームページ <https://www.medicalview.co.jp>

email eigyo@medicalview.co.jp（営業部）

jjs@medicalview.co.jp（『関節外科』編集部）

印刷所 三報社印刷（株）／〒136-0071 東京都江東区亀戸7-2-12

・本誌に掲載された著作物の複製権、翻訳・翻案権、二次的著作物利用権、上映権、データベースへの取り込みおよび公衆送信権（送信可能化権を含む）、譲渡権等は（株）メジカルビュー社が保有します。

・**JCOPY** <出版者著作権管理機構 委託出版物>

本誌の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（TEL 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, email info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

・本誌をコピー、スキャン、デジタルデータ化するなどの複製を無許諾で行う行為は、著作権法上での限られた例外（「私的使用のための複製」など）を除き禁じられています。大学、病院、企業などにおいて、研究活動、診察を含み業務上使用する目的で上記の行為を行うことは私的使用には該当せず違法です。また私的使用のためであっても、代行業者等の第三者に依頼して上記の行為を行うことは違法となります。

広告申込先：（株）文 栄 社 〒113-0033 東京都文京区本郷3-26-1 宮田ビル5階 TEL 03-3814-8541